

「沖縄100号」が育成されるまで



元川越サツマイモ資料館 館長 井上 浩

はじめに

太平洋戦争中とその前後に大活躍をしたサツマイモの品種に「沖縄100号」があった。「沖縄100号」は、沖縄県農事試験場の松永高元技師が沖縄県民のための常食用として育成したものであった。だが、この品種はさまざまな優れた能力を秘めていたため、やがて沖縄だけでなく九州、東海、関東、東北などでも盛んに栽培された。それだけではない、日本軍占領下の中国各地にも普及し、餓えに苦しむ中国の人々も救った。そのことについての拙稿は本誌第28号・第29号にある。

もっとも戦後70年にもなる今日、そのようなことを知っている人はめっきり少なくなった。ところが最近、サツマイモとジャガイモが再び注目されだした。わが国の食料自給率はカロリーベースで40%を割っている。何らかの理由で海外からの食料輸入が長期間できなくなったとき、どうすればよいのか。今年（2015）の春、国はそのような非常時になっても、国内農業をサツマイモとジャガイモ中心に切り替えれば、国民が必要とするカロリーだけは供給できるとし、その試算例まで公表した。

「食料自給率」の引き上げは厳しいが、いざというときの「食料自給力」は、「い

も頼み」にすればなんとかなりそうであることを示した。そのような状況にあるときだけに、「沖縄100号」出現の背景を振り返ってみるのも大事なことのように思われる。

沖縄でのサツマイモの自然交配

沖縄でのサツマイモの人工交配は、第一次世界大戦が勃発した1914（大正3）年から始まった。わが国の場合、サツマイモの花は九州以北ではめったに咲かない。ところが亜熱帯の沖縄なら良く咲く。とりわけ秋になり日が短くなるに連れて盛んに咲き出す。そこにくる昆虫などによって自然交配がおこなわれれば、種子もできる。それが地上に落ちて発芽し、うまく育てばその地下部にいもができる。注意深い人が、自分のいも畑でそのようにして誕生したいものに気づいたとしよう。その1株の中の1本を食べてみておいしければ、残りのいもを種いもとして増殖することができる。

沖縄にはこのようにして篤農家が育成した優良品種がいくつもあった。沖縄本島中部の読谷村^{よみたんそん}で誕生し、やがて同島の全域で栽培されるようになった「佐久川いも」もその一つであった。

佐久川清助生誕150年祭

読谷村は戦後、中身が濃い紫色の“紅いも”による村おこしに成功したところとして知られている。ここは戦前から、いもの大産地であった。同村比謝地区の佐久川清助(1851～1911年)は明治中期、「泊黒(とうまいくるー)」・「暗川(くらがー)」・「名護和蘭(なごうらんだー)」の三種混植畑で自然交配によってできた新しいいもを見つけた。それを8年もかけて育成し、「佐久川いも」として世に出した。2001(平成13)年はその佐久川清助生誕150年にあたるので、読谷村は祝賀事業実行委員会を立ち上げ、比謝区に「佐久川いも発祥の地」と大書した碑を建てた。そのそばに「佐久川いも」の展示圃も設置した。このいもは長紡錘形で白皮白肉、肉質はやや粘質。土質を選ばない早熟の多収種であった。

さらに同実行委員会は2001年9月7日、読谷村文化センターでの記念甘藷シンポジウムを開催した。その基調講演の講師として招かれた私が一番びっくりしたのは、佐久川清助の偉業を永遠にたたえ、いもに感謝し、いものますますの発展を図るために毎月16日を「いもの日」と定めるという「いもの日宣言」であった。これは読谷村議会が提唱し、全会一致で2001年6月22日に決議したものであった。年に1回ではない。毎月1回、「いもの日」がくる市町村は、全国でもここだけであろう。

ちなみに沖縄では「サツマイモ」という言葉はあまり使わない。ふつうは「いも」の意である「イム」や「ウム」・「ウンム」などであり、「いもの日」の「16」は、「イム」の語調からでている。

人工交配事業の流れ～松永高元メモより

沖縄でのサツマイモの人工交配事業は世界で最初におこなわれた画期的なものであった。だが、その発案者も、作業の主任担当者もよくわかっていない。その解明に精力的に当たられている西尾敏彦氏の調査・研究報告が本誌第124号に載っている。「世界初、サツマイモ人工交配の実行者は?－霧のかなたの先駆者たち－」がそれである。

話は飛ぶが私が勤めていた川越のサツマイモ資料館には付属の農園があり、そこで展示用のさまざまなサツマイモを作っていた。その一つに「沖縄100号」があった。それはかつて大活躍をしたものだけに、マスコミが取材にちょくちょくきてくれた。その記事から資料館の存在を知ったらしい、2004(平成16)年春のこと、「沖縄100号」の育成者、松永高元技師のお孫さんであるという松永五月さんが突然来てくれた。聞けば五月さんは川越市の西隣の日高市に住んでいるのだという。

それにしても私は奇遇に驚いた。鹿児島市出身の松永技師は沖縄戦が始まる少し前に病気で鹿児島に戻られている。それで五月さんをお願いした。おじいちゃん関係のもので、もしなにかがあったらぜひ見せていただきたいと。

五月さんはその年の夏、九州の実家に帰り祖父関係の資料を探してくれた。そしてその中の10数点を持参し、コピーもさせてくれた。その一つに松永技師が沖縄での仕事をまとめた手書きメモがあった。同氏は戦後、「沖縄100号」の育成功労者として、各地で表彰されている。メモはそのような晴れの舞台でのスピーチ用に書かれたもの

のように思われた。人工交配事業のスタート時点のことや、その後の経過などがわかる貴重なものなので全文を紹介させてもらうことにする。

「明治二十五年十二月、鹿児島市塩屋町に生まれ大正三年7月、鹿児島高等農林学校農学科を卒業した。卒業後間もなく母校の農場に勤務、同五年農場の助手として二年近く働いていたが主任教授のお世話で大正五年五月、沖縄県糖業試験場名護支場に勤務することになった。その当時、沖縄県には県糖業試験場があり、主として糖業に関する試験研究をしていた。そこに赴任したのはそれ以外に新たに普通農事、園芸、畜産、養蚕などの試験研究などを開始した創業当時であった。

沖縄地方は水田が乏しく、且つ年々何回となく襲来する台風の被害で収穫皆無のことがしばしばあった為に、当時内地その他との交易不便なこともあり、大飢饉の際には多数の餓死者が出るという有様で、今でも農作物の不作という意味の言葉に『餓死』という言葉が普通に使われている。それくらい台風の脅威にさらされていた為、甘藷は主食として最も重要な作物としての地位を占めていたほか、県内農家がほとんど残らず養豚をしており、その飼料にもなった。さらに灌排水の便のある水田の水稻裏作として、全部甘藷を作付けするという状況であった。沖縄は地理的關係から全然降霜がないだけでなく、冬季十度以下の低温に下がることは極なく、甘藷は何時でも植え付けて周年栽培されており、秋になって甘藷畑一面に花の満開しているのを見ることは、内地から行った者には非常に珍しく、

驚異の目を見張ったものである。

斯様な状況にあったので甘藷の優良品種の育成は何をおいても先ず手をつけなければならぬ仕事だと思って、翌大正6年から米麦その他の種芸試験の片手間で甘藷の開花結実に関する極小規模な交配基礎調査や交配を始め、その翌年から一定の計画を立てて試験を継続することにした。何分にも初めての試みであり、参考になる文献なども全然なかった頃のことだったので、技術的に随分と苦労もあり、無駄やでたらめなことも随分やったものだった。貧弱な予算の中からのやりくりには常に苦労したことはもちろんのこと、例えば甘藷が自家不稔であることが不明な為に自家受粉による採種に随分苦労したり、交配不稔群の關係がわからずに少なからず無駄な交配をしたりした。

いろいろと楽しかったことも、苦しかったこともあったが、今にして顧みれば皆懐かしい。例えば甘藷の開花の時刻や、未明の頃に咲く花に訪れる昆虫があるかどうかなどを調べる為に何日間か夜中の三、四時頃から提灯をつけて圃場をあちこち歩き回ったために、試験場の畑に人魂がでるという噂が拡がり、その後しばらくの間、作業人夫がほとんど来なくなって困ったことなど、誠にほほえましい思い出の一つである。

台風の風速三十米以上の暴風雨にたたかれながら、交配圃場の花や結実果を保護するために、むしろをかけて歩かなければならなかったことなども、今となっては皆懐かしい。

大正12年、農事試験場は名護から普天間に移転し、育種の事業も普天間に移り、更

に昭和元年には農林省の甘藷生産改良増殖試験が開始されて島尻郡小禄村試験地（那覇市）に移った。そこで昭和14年までその事業に従事した。この間多数の関係者のお世話になったが、特に普天間時代には稲見才治氏、農林省の委託試験時代には神崎清氏の徹底的な協力を得た。両氏共、沖縄に於ける甘藷育種史上、特筆に価する人たちであると思う」

このメモを『サツマイモの遍歴』（法政大学出版局、2006年）の著者、塩谷格先生（三重大学名誉教授）に見ていただいた。塩谷先生はそれについて、素人の私にもわかるようにと、次のようないねいな解説書簡（2004年12月17日付き）を下さった。

「大正3年に世界に先駆けて沖縄で開始された偉業、サツマイモの人工交配を当時の試験場のスタッフは『大正3年秋交配』と呼んでいます。同4年春に播種、12月に挿苗。そして翌大正5年7月収穫です。冬を越すので冬栽培ともいいます。

松永氏は大正5年5月、そこに赴任していますから、上記の収穫を目撃したかも知れません。新任の松永氏は手探りの甘藷育種が動き始めた現場に立つことになったことは明らかです。同氏は大正7年の交配から後年、最初の結果として沖縄1号、同2号、同7号などを世に出すことになります。

大正8年、糖業試験場名護支場は沖縄県立農事試験場と改称されます。そして農林省から甘藷の人工交配による採種の委託を受けます。委託試験では国の予算が付き、毎年の成果が厳しく問われることになります。

大正15年（昭和元年）には、小禄村に研

究室やガラス室が建ちます。いよいよ国は本腰を入れたようです。農林省委託甘藷改良増殖試験地となりました。大正3年、ひっそりとなされた交配の試みが、わずか10年ほどで国家事業のスタートにまで発展したことになります」。

「沖縄100号」は、このような経過の中から世に出た。

おわりに

松永高元技師は小禄試験地で国からの指示によるさまざまなサツマイモの人工交配をおこない、採れた種子を国が指示する各地の農事試験場に送った。その多忙な仕事に従事しながら、同時に沖縄県民のためのよりよい常食用いもの育成に努めた。それは同氏が沖縄県糖業試験場に赴任してすぐ志したことであった。沖縄は台風と干ばつが多い。地力も低い。そのようなところのいものは悪条件に負けず、短時日でたくさんできなければならない。それもおやつ用ではなく、常食用である。だから食べやすく、いくら食べても飽きないものが求められた。

1934（昭和9）年に育成されると、さっそく沖縄県の奨励品種になった「沖縄100号」はそのような諸条件を満たしていた。『沖縄県農事試験場百年史』（同場、1981年）にその来歴と特性が次のように記されている。

「本品種は農林省委託甘藷生産改良増殖試験地に於いて昭和3年『七福』を母とし、『潮州』を父とする交配組合わせによって育成し、昭和8年まで5カ年の選抜試験を経て選抜した優良品種にして、昭和9年5月『甘藷沖縄100号』と命名されたもので

ある」、「本品種は在来の常食用品種に比し多収にして品質佳良、熟期は極めて早く屑蒚が少ないのを特徴とする」、「蒚は紅色、楕円形にして浅き縦溝があり、黄色、粉質、繊維なく食味佳良」、「春、秋植えいずれにも適し、土質を選ぶこと少ない。蔓の伸長は不十分なる傾向にあるので成長旺盛期前に適宜追肥を行なう。秋植えにおいては特にその必要がある」（180～181頁）。

ちなみに「沖縄100号」の母「七福」は、1900（明治33）年にアメリカから入ったので「アメリカいも」とも呼ばれている。それが今でも伊豆諸島の中の新島などで栽培されている。新島での「七福」による島おこし運動の詳細は本誌第124号にある。小林恭介氏の「アメリカいもで島おこし－東京都新島の事例－」がそれである。